

2023年度業務実績報告書

提出日 2024年1月18日

1. 職名・氏名 准教授・木下和久

2. 学位 学位 博士、専門分野 経済学、授与機関 福井県立大学、授与年月 2010年3月

3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習
①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 管理会計論(2単位)3・4年生
②内容・ねらい（自由記述） 会計情報を企業の内部で利用する管理会計について講義を行い、戦略的な意思決定や業績評価など、企業活動において会計情報をいかに活用するかについて検討し理解を深める。 管理会計の基礎から社会や企業の変化に伴う管理会計の発展を学び、企業活動を管理会計の視点から理解できるようになることを目指す。また、実務事例を通じて、管理会計への理解を深め、自ら企業の調査・分析を行い、管理会計的思考を実践・展開できるようになることを目指す。
③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） 講義は座学であり、理論を中心とすることになる。管理会計は企業内部における会計情報を活用した管理がテーマであるため、学生にとって未知の世界である。このため、話題そのものに馴染みがなく理解には困難を伴う。そこで、理論的な解説だけではなく、より身近な問題として捉えることができるように、また、自分の生活のなかで活用できるような仕掛けを用意した。 まず、受講する学生が、実務での実践について少しでも理解できるように、講義の中で様々な実務事例を紹介し、管理会計の視点から検討・分析を行った。実務事例として、学生が興味を持てる内容であること、なお講義内容をより理解できる物であることはもちろんだが、福井の企業を優先的に数多く紹介した。企業の紹介を行う時は、その企業の優れた点や課題、将来への展望などの解説もあわせて行った。これらを通じて、学生が福井の企業に親しむと同時に、企業とかかわる際の視野をより広めることができることを目標とした。加えて、学生自分が気づいた問題をより深く理解できる能力を獲得できるように意図した。実務事例を説明に利用することで、抽象的な理論と具体的な実務のイメージとを結びつけることができるため、学習内容に対する心理的な障壁を取り除き、容易かつより深く理解することを可能とした。 さらに、受講生には講義外での課題を定期的に課した。この課題は、講義内容を踏まえたうえで、かつ実生活の中で、講義内容を実践することを求めるものである。この中では、学生が実際にPDCAを回すことを求めた。目標・計画をたてた上で実行し、その結果を分析し、是正措置を実行すること。この作業を何回か繰り返した上で、総合的に分析し報告することになる。課題を学習内容の進捗にあわせて設定することで、学習が進むにつれて、実生活の中で管理会計の理論を実践するような仕掛けを用意している。これにより、講義内容をより身近な問題としてとらえるようにするとともに、実生活そのもので学問を展開することで、学問への意欲を高めることを目指している。この課題の内容は、段階的により高度の学習内容となるように設計している。最初の課題は比較的容易にすることで、会計への抵抗感をやわらげ、学習が進むにつれて、より会計理論に即した分析・検討が可能になる内容とすることで、課題を実践することで自然と学習を深めることを目指している。 また、毎回講義の受講後、リアクションペーパーを提出することを求めている。リアクションペーパーでは、講義内容の重要な点、疑問点などをまとめ、質問・感想・要望について

提出するよう求めている。講義内容をまとめることの目的は、第一に学習内容の定着をはかることであるが、加えて学生のまとめる能力の育成と、講義を受ける時の動機付けにもなることも意図している。このリアクションペーパーは、学習効果を上げる目的だけではなく、講義への質問や感想、あらゆる要望について「ついでに」書けることも狙いとしている。学生にとって「提出しなくてはいけないもの（まとめ）」と「質問」をセットにすることで、質問することへのハードルを下げ、学生の要望や疑問をより多く吸い上げる仕掛けとしている。

リアクションペーパーを通じて積極的に学生の意見を集める効果を上げるため、記載された疑問や要望は、どんな内容であっても次の講義ですべて紹介し、フィードバックを行った。特に講義の内容に関する質問・疑問については、前回の講義内容に追加で解説を行ったり、追加資料を作成したりすることができ、講義を補完するのにとても役立った。講義の仕方に関する要望であれば、可能なものは次回から対応して、より良い講義となるようにし、対応できないものはその理由を説明して、学生が納得できるようにフィードバックを心掛けた。講義内容とは関係がない質問もあるが、意識して紹介するとともに、回答の際は気軽に質問しても良いと学生が感じられる回答となるように心掛けた。このことで質問の間口を広げ、より多くの要望を講義に反映させることができる効果的なツールとなっている。

本年は対面を原則としながら、遠隔（ライブとオンデマンド）の講義も併用することで、学生が自由に選べるようにした。学生から遠隔講義への要望が多くあったため対応したものだが、遠隔講義の実施・録画データの準備に手間が必要となった。感染に対して不安のある学生はまだ多く、体調不良の学生にとっても安心して講義を受ける機会を提供できたことや、意欲的な学生が理解できなかった内容を講義録画で再確認できることもあり、労力に見合う効果はあったと考える。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等  
原価計算論 I (2 単位)、2・3・4 年生

②内容・ねらい（自由記述）

製品の原価を中心に原価管理について多面的な検討を行う。製品原価がいくらかを把握するための計算方法について学習し、なぜその計算をするのか理論的に解説する。加えて実務で原価が活用されている事例を紹介し分析する。

原価の計算方法に関する基礎的な内容の理解と計算能力を身に付けることを目指し、原価計算の目的や効果など、理論的側面から原価計算の理解を深める。実務において実践されている原価計算や原価管理事例について理解し、企業の行動を自ら調査・分析できることを目標とする。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

講義は理論の説明と計算を中心として構成されている。加えて実務事例の紹介と課外学習を組み合わせることで、より効果的な学習となることを狙っている。最初は簡単な会計の話題からはじめるが、簿記が苦手な学生でも理解できるように工夫をするとともに、管理会計的な思考へと誘導し、基本的な計算、発展的な計算へと学習内容を組み立てている。

講義においては、実務での実践についてより身近に感じるとともに理解が深まるよう、講義の中で実務事例の紹介を行った。これにより、実務事例の学習だけでなく、学生が自分で他の事例を理解する能力を獲得できることを目指した。実務事例は、学生が興味を持てる内容であり、なおかつ講義内容と関連する物を選んだ。実務事例を説明に利用することで、抽象的な理論についてより容易に理解を深めることが可能となった。実務事例として、福井の企業を優先的に取り上げている。様々な企業を紹介したが、紹介に留まらず、その優れた点や課題、将来への展望などの解説も行った。これらを通じて、学生が福井の企業に親しむと同時に、企業とかかわる際の視野をより広めることができることを目標とした。

受講生には講義外での課題を定期的に課した。課題は、講義内容を踏まえたうえで、より多くの企業を積極的に探すことや、企業の有価証券報告書を実際に読むこと、さらに関連すると思われる経済状況を調査し、それらを総合的に分析し報告することを求めた。これによ

り、講義内容をより身近な問題としてとらえるようにするとともに、実生活の中で、より多くの企業について意識すること、企業の会計と経済状況とを結び付けられるか考える習慣をつけ、学習意欲を高めることを目指した。

講義では、学習内容をより理解し確認できるように、毎回、計算問題を配布した。これにより講義だけでは理解しにくい内容や理論について理解をすすめることが可能になっている。更に、問題を解く過程で、自分の理解度や修得度合いが十分であるか、不十分であるかを認識できる機会となっている。計算を行うこと自体により小さな達成感を得ることができ、学習に対する動機付けとなる仕掛けとなっている。

また、毎回講義の受講後、リアクションペーパーを提出することを求めている。リアクションペーパーでは、講義内容の重要な点、疑問点などをまとめ、質問・感想・要望について提出するよう求めている。講義内容をまとめることの目的は、第一に学習内容の定着をはかることであるが、加えて学生のまとめる能力の育成と、講義を受ける時の動機付けにもなることも意図している。このリアクションペーパーは、学習効果を上げる目的だけではなく、講義への質問や感想、あらゆる要望について「ついでに」書けることも狙いとしている。学生にとって「提出しなくてはいけないもの(まとめ)」と「質問」をセットにすることで、質問することへのハードルを下げ、学生の要望や疑問をより多く吸い上げる仕掛けとしている。

リアクションペーパーを通じて積極的に学生の意見を集める効果を上げるため、記載された疑問や要望は、どんな内容であっても次の講義ですべて紹介し、フィードバックを行った。特に講義の内容に関する質問・疑問については、前回の講義内容に追加で解説を行ったり、追加資料を作成したりすることができ、講義を補完するのにとても役立った。講義の仕方に関する要望であれば、可能なものは次回から対応して、より良い講義となるようにし、対応できないものはその理由を説明して、学生が納得できるようにフィードバックを心掛けた。講義内容とは関係がない質問もあるが、意識して紹介するとともに、回答の際は気軽に質問しても良いと学生が感じられる回答となるように心掛けた。このことで質問の間口を広げ、より多くの要望を講義に反映させることができる効果的なツールとなっている。

本年は原則対面講義としながらも、コロナやインフルエンザなどによる公欠者のために遠隔(ライブとオンデマンド)の講義を併用した。遠隔講義の実施・録画データの準備に手間が必要となるが、学生の学修機会を保障するのに有効であり、労力に見合う効果はあったと考える。冬期は大雪などにより登校が困難な日でも、常時遠隔受講が可能のように講義を行っているので、トラブルなく講義を行うことができる。

①担当科目名(単位数) 主たる配当年次等  
原価計算論Ⅱ(各2単位)、2・3・4年生

②内容・ねらい(自由記述)

製品の原価を中心に原価管理について多面的な検討を行う。製品原価がいくらかを把握するための計算方法について学習し、なぜその計算をするのか理論的に解説する。加えて実務で原価が活用されている事例を紹介し分析する。

原価の計算方法に関する発展的な内容の学習と基礎的な計算能力を修得する。単なる原価計算から原価管理へと発展した視点から学習を進めることで、原価計算・原価管理の目的や効果など、理論的側面から原価計算の理解を深める。実務において実践されている原価計算や原価管理事例について理解し、企業の行動を自ら調査・分析できることを目標とする。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫(自由記述)

講義は理論の説明と計算を中心として構成されている。加えて実務事例の紹介と課外学習を組み合わせることで、より効果的な学習となることを狙っている。最初は簡単な会計の話題からはじめるが、簿記が苦手な学生でも理解できるように工夫をするとともに、管理会計的な思考へと誘導し、基本的な計算、発展的な計算へと学習内容を組み立てている。

講義においては、実務での実践についてより身近に感じるとともに理解が深まるよう、講義の中で実務事例の紹介を行った。これにより、実務事例の学習だけでなく、学生が自分で

他の事例を理解する能力を獲得できることを目指した。実務事例は、学生が興味を持てる内容であり、なおかつ講義内容と関連する物を選んだ。実務事例を説明に利用することで、抽象的な理論についてより容易に理解を深めることが可能となった。実務事例として、福井の企業を優先的に取り上げている。様々な企業を紹介したが、紹介に留まらず、その優れた点や課題、将来への展望などの解説も行った。これらを通じて、学生が福井の企業に親しむと同時に、企業とかかわる際の視野をより広めることができることを目標とした

受講生には講義外での課題を定期的に課した。課題は、講義内容を踏まえたうえで、かつ実生活の中で、講義内容を実践し、実践した結果を分析・報告することを求めた。この中では、学生が実際にPDCAを回すことを求めた。まず現状を把握する。このため、何らかの方法で計測することを求めた。現状を分析した上で、計画をたて実行する。実行した結果を分析した上で、計画を達成できるように是正措置を実行する。この作業を何回も繰り返した上で、総合的に分析し報告することを求めた。これにより、講義内容をより身近な問題としてとらえるようにするとともに、実生活そのもので学問を展開することで、学問への意欲を高めることを目指した。また、この課題の実践においては、日常生活の中で長期間にわたりコスト意識を持ちながら目標に向かって様々な考察をしながら実践しつづける必要がある。講義の内容を越えて、学生の主体的な気付きを得ることも目的となっている。

講義では、学習内容をより理解し確認できるように、毎回、計算問題を配布した。これにより講義だけでは理解しにくい内容や理論について理解をすすめることが可能になっている。更に、問題を解く過程で、自分の理解度や修得度合いが十分であるか、不十分であるかを認識できる機会となっている。計算を行うこと自体により小さな達成感を得ることができ、学習に対する動機付けとなる仕掛けとなっている。

また、毎回講義の受講後、リアクションペーパーを提出することを求めている。リアクションペーパーでは、講義内容の重要な点、疑問点などをまとめ、質問・感想・要望について提出するよう求めている。講義内容をまとめることの目的は、第一に学習内容の定着をはかることであるが、加えて学生のまとめる能力の育成と、講義を受ける時の動機付けにもなることも意図している。このリアクションペーパーは、学習効果を上げる目的だけではなく、講義への質問や感想、あらゆる要望について「ついでに」書けることも狙いとしている。学生にとって「提出しなくてはいけないもの(まとめ)」と「質問」をセットにすることで、質問することへのハードルを下げ、学生の要望や疑問をより多く吸い上げる仕掛けとしている。

リアクションペーパーを通じて積極的に学生の意見を集める効果を上げるため、記載された疑問や要望は、どんな内容であっても次の講義ですべて紹介し、フィードバックを行った。特に講義の内容に関する質問・疑問については、前回の講義内容に追加で解説を行ったり、追加資料を作成したりすることができ、講義を補完するのにとても役立った。講義の仕方に関する要望であれば、可能なものは次回から対応して、より良い講義となるようにし、対応できないものはその理由を説明して、学生が納得できるようにフィードバックを心掛けた。講義内容とは関係がない質問もあるが、意識して紹介するとともに、回答の際は気軽に質問しても良いと学生が感じられる回答となるように心掛けた。このことで質問の間口を広げ、より多くの要望を講義に反映させることができる効果的なツールとなっている。

本年は原則対面講義としながらも、コロナやインフルエンザなどによる公欠者のために遠隔(ライブとオンデマンド)の講義を併用した。遠隔講義の実施・録画データの準備に手間が必要となるが、学生の学修機会を保障するのに有効であり、労力に見合う効果はあったと考える。冬期は大雪などにより登校が困難な日でも、常時遠隔受講が可能のように講義を行っているので、トラブルなく講義を行うことができる。

① 担当科目名(単位数) 主たる配当年次等  
経営学総論Ⅱ(各2単位)、1年生

② 内容・ねらい(自由記述)

管理会計について紹介するとともに、原価分析を応用することで身近な課題解決に対し、経営の視点や社会の視点から分析判断できる能力の獲得を目指す。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

講義は基礎の基礎からはじめ、段階的に高度な内容へと進めていくが、初年次配当科目という点から、理論的に深い話は紹介にとどめ、学修内容がいかに実生活において重要な分析ツールとなり判断基準を提供するかについて実感できるように工夫をした。

講義においては、事例を積極的に取り上げ紹介した。この時、より身近に感じることができるよう、学生の身近な話題、学生にとって将来の不安となっている最近の話題をとりあげた。

講義は原則対面としていたが、講義直前に大雪のために休講もしくは遠隔講義とするように大学から連絡があった。しかしすでに登校している学生も多く、急遽、対面と遠隔（ライブ）の講義を実施した。他の講義も含め、遠隔対応ができる体制を整えていたため、トラブルなく講義を行うことができた。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等

演習Ⅰ 3年生

②内容・ねらい（自由記述）

管理会計学や原価計算論について学習するとともに、企業の競争力の源泉を探るため、管理会計学の見地から企業の調査・分析・検討を行う。知識の獲得とその検証、論理的思考の実践、会計マインドの修得を目指す。企業の調査、分析・検討を通じて、実務や実生活における合理的な判断や意思決定に資する講義となることを目指す。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

受講生が課題の調査を事前に行い、講義において報告をし、他の学生と議論をすることで、学習し、理解を深めることを目指した。少人数であることを利用し、学生が積極的に発言できるようにうながすとともに、学生が自ら気づき、理解できるように心掛けた。

テキストとして入門から中級の内容のものを利用し、まず学力はもちろん、報告・議論などさまざまな基礎的な能力の獲得を目指した。また、特別な目標を掲げ、達成にむけてチャレンジした。学生の興味や意欲を優先し、学生の意見や要望を積極的に反映できるような場となるように心掛けた。学習では、試行錯誤しながら、調査・学習を進め、主体的に取り組むように促した。本質的な理解ができることも目指し、繰り返し議論し、論理を突き詰めることを求めた。

学生が主体的に発言すること、多人数の前で話すことになれることなどを目的として、毎回学生が数分間自由に話をすることを求めている。回を重ねるにつれて、話す内容、話し方など、成長していることを実感できる。加えて教員と学生の交流、学生間の連携などにも大きな効果があった。後期では、ビジネスフレームワークの講義や、学生の自発的な課題設定とグループワークによる調査・報告・討論を行った。

本講義では、福井を代表する企業（株式会社 TOKO）の見学を行った。企業見学の前には、ビジネスフレームワークを用いて企業分析・業界分析を行い、質問票を作成・送付した後に見学を行った。これにより、学生が企業について理解を深めた上で見学できるようにするとともに、より主体的に見学できるようになっている。この企業見学により、学生が福井の企業に対して理解を深めるとともに、身近に感じることができる。また、学生は就職活動や就職後に必要となる分析能力を獲得できるとともに、演習の学修においても非常に効果を上げることが可能である。

【フィールドワーク等 1件】

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等

演習Ⅱ 4年生

②内容・ねらい（自由記述）

管理会計学や原価計算論について学習するとともに、企業の競争力の源泉を探るため、管理会計学の見地から企業の調査・分析・検討を行う。知識の獲得とその検証、論理的思考の実践、会計マインドの修得を目指す。企業の調査、分析・検討を通じて、実務や実生活における合理的な判断や意思決定に資する講義となることを目指す。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

受講生が課題の調査を事前に行い、講義において報告をし、議論をすることで、学習し、理解を深めることを目指した。少人数であることを利用し、学生が積極的に発言できるよううながすとともに、学生が自ら気づき、理解できるように心掛けた。

前期は学生が就職活動のため、継続する課題を選ぶことが難しく、各回で簡潔する課題を選び、学生の要望を反映させながらすすめた。特に、ゼミでの研究はもちろん、学生が直面している就職活動や就職後に有用な企業分析のためのビジネスフレームワークを取り上げた。ビジネスフレームワークについて説明した後、それを利用し実際に分析を行い、全員で議論し意見をまとめることを繰り返し行った。前期の途中から後期にかけては、学生の興味や意欲に応じて、個別に調査論文のテーマを設定し、調査・研究を進めた。指導の中ではより本質的な問題へのアプローチをめざした。また、本質的な理解ができるまで、繰り返し議論し、論理を突き詰めることを求めた。取り組む論文の結論が見えない中、学修を続けることで、新しい発見ができた時の学生の表情はとても価値あるものである。

学生が主体的に発言すること、多人数の前で話すことになれることなどを目的として、毎回学生が数分間自由に話をするを求めている。回を重ねるにつれて、話す内容、話し方など、成長していることを実感できる。加えて教員と学生の交流、学生間の連携などに大きな効果があった。

本講義では、福井を代表する企業（株式会社 TOKO）の見学を行った。企業見学の前には、ビジネスフレームワークを用いて企業分析・業界分析を行い、質問票を作成・送付した後に見学を行った。これにより、学生が企業について理解を深めた上で見学できるようにするとともに、より主体的に見学できるようになっている。この企業見学により、学生が福井の企業に対して理解を深めるとともに、身近に感じることができる。また、学生は就職活動や就職後に必要となる分析能力を獲得できるとともに、演習の学修においても非常に効果を上げることが可能である。

【フィールドワーク等 1件】

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等  
基礎ゼミ 2年生

②内容・ねらい（自由記述）

大学における学習や調査・報告、社会において求められるスキルについて学ぶと同時に、福井の企業や経営・経済に関する身近な話題をテーマに実践し理解を深める。

大学での学習、大学3・4年生、社会人において必要となるスキルの習得をめざし、体験学習を実施する。課題として地域の企業、経営・経済に関連する話題を学生自ら選び、調査・報告・議論を行うことで、ビジネスの利益構造や、地域や世界への理解を深める。

④ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

講義を大きく学習と実践に分け、学生の意欲を引き出すように、とにかく「やってみる」ことを大切にすすめた。講義の前半では、「大学生」として必要なスキルの修得・熟練を目指し、大学における学習、調査の方法など、自主的な学びの手法を解説し実践した。講義の後半では、ビジネスフレームワークに関する学習と実践を行った後に、ビジネスゲームによるアクティブラーニング、経営に関わる事柄を題材とした受講生による調査の実施と報告を行い、学生が主体的に活動する内容とした。

学生の反応に柔軟に対応することで、学生の満足度を高めるよう改善を継続した。さらに少人数教育の強みをいかし、受講生のつながり、グループワーク、継続的な読書・学習への

取り組みを求めた。

また、グループごとに企業調査を行った。各グループで調査先企業を選び、実際に調査先企業へ調査依頼のポイントメントをとり企業訪問を行った。本年は3グループに別れ、株式会社カズマと株式会社廣部硬器、マエダセイカ株式会社に調査・報告を行った。それぞれの個性が色濃くあらわれる活動であり、学生の満足度も高い内容になっている。加えて、福井を代表する企業（株式会社 TOKO）の見学を行った。これらの企業見学・調査により、学生が福井の企業に対して理解を深めるとともに、身近に感じることができた。今後の専門教育において大きな役割を果たすと考える。

学生が主体的に発言すること、多人数の前で話すことになれることなどを目的として、毎回学生が数分間自由に話をするを求めている。回を重ねるにつて、話す内容、話し方などに成長がみられるが、加えて教員と学生の交流、学生間の連携などに大きな効果があった。

課外課題として、読書レポートを毎月課した。これにより読書の習慣をつけるとともに、講義内容を実践し、文章を書くことの練習となることを意図した。

【フィールドワーク等 2件】

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等  
外書講読 I 2年生

②内容・ねらい（自由記述）

ビジネスモデルに関する基本的な内容と事例により構成されているテキストについて、ジグソー法によるグループワークでの翻訳から、内容の検討、学習内容を用いた分析を行う。

グループワークにより学生が助けあうことで英語能力の違いを埋め、積極的な発言や議論を通じて学習内容の理解を深め、グループワークの能力を向上させる。同時に、基本的なビジネスフレームワークについて学習し、これを用いて身近な企業やビジネスを分析することで、分析能力を修得し、学習内容の理解を深める。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

講義ではビジネスフレームワークに関する英語文献の全訳を行い、学習内容を利用して身近な企業やビジネスの分析をグループで行なった。この際、あるトピックやテーマについて書かれた資料をグループに分かれて読み、他の人とその情報を交換し、交換した知識を統合してテーマ全体の理解を構築する手法であるジグソー法を採用した。これにより、各グループが責任をもって翻訳・理解することを可能とし、また全体の理解につなげるとともに、翻訳を行ったグループとは異なるグループで実務の分析を行うことで、各グループの翻訳に責任が生じ、参加学生が主体的に翻訳に取り組めるようにした。さらに、英文にビジネス分析に使えるビジネスフレームワークを選ぶことで、翻訳した内容を活用して実務を分析することが可能となり、学習内容の効用をすぐに実感できるようにした。

昨年までは輪読形式で英文の翻訳を行い、受講生が自主的に発表することを求めた。英語の能力は学生により違いがあるため、まず訳に取り組み・発表することを目標とするなど、英訳については深く問わず、概要を理解すること・専門用語を間違えないことなど基本的な内容を充実させることを方針とした。しかし、英語に対する苦手意識が強い学生の授業に対する取り組みを変えることはできず、主体的な参加意欲を引き出すことはできなかった。

今回から採用したジグソー法により、英語が苦手なメンバーは英語が得意なメンバーに助けをもらうことも可能となり、グループで翻訳を担当した箇所への取り組みに積極性を引き出すなど、様々な効果を得ることができた。これまでと違い、学生が主体的に取り組んでいる姿勢がみられるのが印象的である。

また、学生が主体的に発言すること、多人数の前で話すことになれることなどを目的として、毎回学生が数分間自由に話をするを求めている。回を重ねるにつて、話す内容、話し方などに成長がみられるが、加えて教員と学生の交流、学生間の連携などに大きな効果があった。

課外課題として、読書レポートを毎月課した。これにより読書の習慣をつけるとともに、

講義内容を実践し、文章を書くことの練習となることを意図した。  
企業見学を行うべく企業に打診したが、日程の調整ができず実施することができなかった。

**(2)その他の教育活動**

内容

学生の就職活動の相談・支援



## 5. 地域・社会貢献活動

### 高大連携公開講座

「経済学・経営学はおもしろい！」2023年10月21日、10月28日 福井県立大学

### 開放講義

『価格と量』と『価格と原価』2023年10月20日 福井県立鯖江高等学校

### 短期ビジネス講座

「優良企業の事例から学ぶ管理会計」 2023年12月2日 福井県立大学

### 地域創生プログラム「ふくい企業価値共創ラボ」

「企業管理と企業会計」2023年11月10日 福井県立大学

福井県企業調査：成功・失敗事例ケーススタディー作成など

## 6. 大学運営への参画

### (1)補職

地域経済研究所兼任教員（2019年度～2023年度）

### (2)委員会・チーム活動

学生支援委員会（2022・2023年度）

特別企画講座・特講担当（2023年度）

ハラスメント相談員（2016～現在に至る）

### (3)学内行事への参加

オリエンテーション、入試説明会、キャリアセンター懇談会、ハラスメント人権委員会研修会、など

### (4)その他、自発的活動など